
世界を浸蝕する者

鯉庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を浸蝕する者

【Nコード】

N1423T

【作者名】

鯉庵

【あらすじ】

秘密結社“北城”の先代頭首『北城 殺』ホウジョウ・サイに呼び出される。

仕事の依頼内容は自身の旧友である『川神鉄心』の孫娘『川神百代』を徹底的に“お仕置き”して欲しいという物。殺に“借り”があるソラは断る訳にもいかず引き受ける。

再び高校生として『川神学園』編入することに

注意事項（前書き）

楚良ばねえ

注意事項

世界の半分は『悪』で出来ている。——。自分の事を“
欠陥人間”と称す『時雨 楚良』《シグレ ソラ》が『真剣で私に
恋しなさい』に登場。最強チート能力『悪魔の臓器』《デビルズ・
オーガン》を駆使し世界を“浸蝕”する『暴虐者^{カリギュラ}』。

“世界”から忌み嫌われる少年ソラがマジ恋に出たらどうなるか？
と思い始めました。

注意事項

ソラは存在自体がチートです。『DEVILS DEVELOP
CONCEPT』同様一方的に無慈悲に容赦なく潰します。百代や釈
迦堂さんをほぼ無傷で倒しちゃいます。

『未空ルート』のエンド後からのスタートです。

『DEVILS DEVELOP CONCEPT』の用語を使う事
が多いのでネタが解らない人は読むと意味がわからないという事が
沢山出てきます。

作者の書く文章は駄文です。

更新は不定期

ディレクト・チューン
情報浸蝕が万能になります。（神様その物WW）

以上を了承の上でお読みください。

注意事項（後書き）

あーあ。 やっちゃった

朝（前書き）

書けるかな

朝

「ふう………」

朝、いつも通りに起きてすぐ煙草に火を付けて肺の中を毒煙で満たす。

鼻を刺激する匂い。

舌を痺れさせるような不味い味。

「何で不味いもん吸ってんだろ………」

「くせえし………」

そう言いながら窓を開けて換気をする。

喫煙者で有りながらそんな事を言っている自分が滑稽に思えた。

「後、どれくらい残ってんだっけ？」

父親の形見であるこの煙草は製造中止になっており生前に大量に買占め文字通り『腐る』ほど残っている。

両親の遺品を整理している際に発見したもので同じく遺品である眼鏡同様俺への負荷制約バイアスの役割を果たしている。

自分に課した小さな制約。

脆く儚い鎖。

けど俺にはそれで充分だ。

いつでも『それ』を引き千切る事は出来るが、そのくらいが丁度いい。

眼鏡を掛けるとほんの少しだけ視界がぼやけた。

「ソラ、もう起きてる——？」

自分を呼ぶ女の声。

二回ほどノックをしてそのまま扉を開けて中に入ってくる。

「もう……起きてるなら返事くらいしてよ」

少し呆れた顔をして言われた。

「未空さんが返事する前に入って来たんじゃない」

この人は『向日 未空』。

癖っ毛の強い緑色の短い髪。

琥珀色の瞳に色白の肌。

全体的に整った綺麗な顔。

だが最も注目すべきは何を食ったらそこまで育つのか解らない豊満

な胸と世の中のメスが恨んでやまないであろう抜群なプロポーション。

それに加え、飢えたオス共を誘っていると思えないフェロモンを放っていた。

「朝御飯出来てるから……コーヒーと紅茶どっちがいい？」

「……コーヒーで」

「解ったわ。それよりもいい加減やめて欲しいんだけど……臭いが染み付いちゃうわ」

溜息を吐きながら嫌悪感たっぷりに言い放つ。

「ここは俺ん家でしょ？未空さん所で世話になってった時は吸わなかったじゃん」

にっこり笑って返す。

「もう……」

もう一度深い溜息を吐いて部屋を出て行った。

「遅いぞー！！何やってんの！？時雨のくせに私様を待たせるとはいい度胸してんじゃない」

人様の家で勝手に寛いでおまけに朝食を集りに来た上にそんなゴーマンな態度で俺を罵るエキセントリック猫娘の名は『向日 アズミ』。

未空さんの義妹であり、負けず劣らずハイスペックな運動神経の持ち主で顔も美少女だがその性格が非常に残念なお陰でプラマイゼロになっている。

俺の天敵だ。

「……………何でお前が此处にいるわけ？」

頭痛がする頭を押さえながら問いたです。

「そんなの決まってんじゃない」我が姉の手料理を食べる事が出来るのは妹様の特権でしょう？それとも何？？文句でもありやがる訳で

すかね？義兄さまは」

「別に……」

これ以上言っても面倒くさい事になるので放置する。

「おまたせ」

そうこうしてるうちに料理が運ばれてくる。

オーソドックスで非常に美味そうな朝食だ。

「相変わらずおいしー」

幸せそうな表情で食べている。

「お前さ……遠慮とかそういうの無い訳？ほぼ毎日集りに来て下さってるお陰で我が家の食費に尋常じゃないほど負担が掛ってるんですけどね？妹様？」

たっぷりと皮肉と嫌味を込めて言ってる。

「んー」何かなーそれは私様に言ってるのかなあ？『あの時』私様が情報を提供しなければ今の生活が出来なくなっていたかもしれないのに」

「…………お前に言っただ俺がバカだった」

「にやにをーやんのかこそおー………………！！！」

「時雨のヴァカ！ヴァーカ！鬼畜眼鏡――！色欲外道おー！！三千世界の落ちこぼれ――」

「……………」

きつとこいつは誰かに後ろから刺されると思う。

「こら！アズミ！なんてこと言っの」

「だって――」

未空さんに叱られ拗ねるアズミ。

「ほらっ！仕事があるでしょ！早く食べちゃいなさい」

「はぁーい……」

騒がしかった朝食を終え、未空さんが声を掛けて来る。

「今日は『先生』が依頼したい事があるって言ってたから私も一緒に行くわ」

「またあのババアかよ……あの人無茶苦茶な依頼ばっかして来るんだよ……人使い荒いし」

「『お気に入りに入り』は特に苛めたがる人だから……」

俺の愚痴を聞いて苦笑する。

「まあその分金払いはいいからプライマイゼロか……」

着替えを終えて『北城』へ向かう。

運命が動き出す……

朝（後書き）

さあ頑張るぞ

依頼（前書き）

かっけるかな！かっけるかな！！

依頼

「相変わらず嫌味なかさだな……」

『北城』門の前にソラが立つ。

いつ来ても此処の空気と門構えは気に入らない。

高さはそれほどでもないがこの門には『聳える』という形容がぴったりだった。

何百年とも言える『秘密結社』としての歴史と威厳。

その威圧感は嫌悪に値するものだ。

何よりも此処へ来ると叔母の実家を思い出す。

あの『ナレノハテ』の臭いがする家の事を。

とても許容する事の出来ない臭さを思い出す。

「ふう……」

胸ポケットから煙草を出し負荷を掛ける。

自分の中にある『ケダモノ』に枷を付ける。

「ちょっと……ソラ、捨てて。今から先生に会つのよ……」

喫煙し始めた俺を未空さんが咎める。

「別にあのババアなら気にしねえよ……」

「私は、捨ててって言ってるの……聞こえなかった？」

嗤ってはいるが心情は全く逆だろう。

ゴミを見る目だ。

「……………はい」

素直に従わないと本気で殺されそうなので素早く携帯灰皿を取り出しもみ消す

「すいませーん。今日、殺先生とお会いする事になっている向日未空と時雨楚良ですが先生は御在宅ですか？」

インターフォンを押して呼びかける。

『未空様ですね……少々お待ち下さい』

俺の存在を無視するのは中々上出来だ。

『あの一件』以来俺はこの屋敷の連中から毛嫌いされている。

まあ元々嫌われている事は多いが此処は別格だろう。

門がゆっくりと開く。

中へ入ると大層立派な日本庭園が広がる。

ただっ広い庭だが、隅々まで手が行き届いており正に芸術と言っても過言ではない。

「待つてたよ……二人とも」

紫色の長い髪に紅い瞳。

肌は幽霊の様に真っ白で不気味なほど整った顔。

服装は首の下から臍までぱっくりと開いた黒い服。

豊満な胸がはみ出しそうである。

国家の狗を呼べば豚箱行きだろう。

「遠路遙々悪いねえ……」

そう言つて艶笑する。

とても御年。歳には見えない艶めかしい顔に思わずゾクリとする。

「そう思つてんなら呼ぶんじゃねえよババア」

「あっはは！！相変わらず生意気な糞餓鬼だねえ……まあ……そこがそそるんだけどね……」

そう言いながら俺の顎を細い指でなぞる。

「先生……悪いんですけど、早く本題を聞きたいのですが……」

「そう怖い顔しないでくれよ……別にあなたの大事な牡を取った
りなんてしないさね……」

「そういう事を言ってるんじゃないありません!」

真っ赤になって否定する。

「あら……じゃ搔つ攫つてもいいのかい?」

「……殺しますよ?」

殺意に溢れた『瞳』。

「おっと……その『瞳』で見るのは止めてくれ……心臓に悪い」

「全く……」

「はあ……」

毎度の事だが未空さんを弄って遊ぶのは止めてもらいたい。

家に帰るたび不機嫌になりその相手をするのは俺なのだ。

この人の機嫌の悪さは人を殺しかねない。

文字通り命がけで機嫌を取らないといけない。

婆さんの部屋へ招かれ二人並んで座る。

未空さんは正座。

俺は胡坐をかく。

正面に婆さんが座る

肘掛けに体重をかけ足を伸ばしている。

座るというより寝ころぶの体制に近い。

「ふう……」

婆さんが煙管を吹かす。

「あんた達を呼んだのは……解っているとは思うが『仕事』さね……ただちよいと変わった内容でねえ……まあ正確には婿殿だけなんだが未空に来てもらったのは了承を貰うためだ」

「それはどういう事です……？まさかそんなに危険な仕事何ですか？」

怪訝そうな顔をする未空さん。

俺は前置きはどうでもいいので適当に聞き流す。

「いんや、寧ろ危険度で言ったら今までで一番低い仕事だよ……」

「では、何故……？」

「あんた等『川神鉄心』って知ってるかい？」

「え……あの『武神』と言われている鉄心先生ですか？」

「そう……実はあの爺とは古い友人でねえ……そいつが珍しく泣きついて来て何とかしてくれと頭を下げられちまったのさ……」

「私もあの妖怪爺には世話になってね。無下に断る訳にもいかなかったのさ」

「実はね……あの爺には孫が居るんだよ。その孫ってのがちと『危

うい『んだよ』

「危うい……ですか？」

「まあ具体的に言つと『逸脱』しかけてる」

『逸脱』という言葉に俺の全身が反応する。

「『逸脱』つて……川神家は『「ゲニート」血族』ではないはずだ」

「ああ……奴らは真正正銘『ホロウ・ボット通常人類』さ……」

「ふざけてんのか……？ババア？」

俺は有りつ丈の殺気をぶつける。

冷酷に。

人を人とも思わない様な感情のない瞳で射抜く。

「ふはは……いいねえその『瞳』濡れちまいそうだよ……」

欲情で桃色掛つた頬にどこまでも淫らな瞳をした。

「まあ……正確には『逸脱』じゃあない……『それ』に近い状態さ」

「私たちみたいな『穢れた』血は流れてない……「ホロウ・ボット」変質もしていない……だが、其処へ『堕ちそう』になつて……「ホロウ・ボット」通常人類でありながら『情報臨界』を突破しそうなんだよ……」

「……………」

『ケイジ』というのは『北城』の幹部を務める『狩人』ソリット・ボットで俺の仕事仲間でもある。

未空さんに偉くご執心で何度殺されかけてもアプローチしていたマゾ（変態）野郎だ。

まあ俺が『躰』をしてからは諦めたが。

「その話がマジならその与太話も信じられるな……………」

俺は興奮を抑えるため煙草に火を付ける。

「ふう……………」で、依頼ってのはソイツをブチ殺せって？」

「相変わらず物騒だねえ……………違うよ。ケイジと同じように解らせてやって欲しいのさ……………この世の中には絶対越えられないもんがあるってね……………」

「様は『死なない程度に躰てくれれば』って事さ……………お前さんなら出来るだろう……………？ 実際内の狗どもにやったんだ……………まあ比較にはならんだろうがね」

「めんどくせえ……………」

「あの……………先生……………私の許可が欲しいと仰ってましたが、それは……………」

「ああ……………その依頼の間、嬪殿にはあちらの学校へ行って貰うから

ねえ」

「は……？俺、此間卒業したばっかなんだけど……」

「そんなもん『北城』の力があればいくらでも誤魔化せる……」

にやりと嗤う。

「はぁ……本気だな……」

「あら、もう少し抗うと思ったのにねえ……期待外れ」

「何を期待してやがる糞婆が」

「それじゃ私はその学園で教師を？」

「いんや……未空には違う任務を用意してある」

意地悪く言う。

「そんな……」

「まあそんなに気を落とさんでくれ」

そう言いつつも嗤うのを必死で押さえてるのが見え見えだった。

「鉄心にはもう伝えてある……『川神院』に行けば会えるだろうさ
……期待してるよ……媚殿」

「先生……私に何か隠してませんか？」

「何の事だい？」

「恍けないで下さい……！絶対何か隠してるでしょ？」

「………解った。解ったからそんなに怒らないでくれよ………実は………」

「じ、実は？」

「孫つてのが『女』なのさ………（にや）」

「……………」

「あの牡にやられたら惚れるだろねえ……私だってお前さんの男でなかつたら寝取って自分の物にしてるからねえ……」

「先生……（につこおゝ）ちょっとお話ししょうか……」

「ちょっ……未空……砕ける！砕けるって！肩！イタッ！イタタタタタタッ」

依頼（後書き）

はい！駄文〜！！！！

無理やり感ばねえ

出会い（前書き）

戦闘シーン不安でタマリマセン……

能力についての齟齬があった場合は罵って下さい

出会い

「ごめんなさい……待った？」

塀に凭れかかり煙草を吸っていた俺に未空さんが声を掛けてくる。

「そんなに待ってないよ。何かあったの？」

「ううん、気にしないで。何も無かったわ」

実際は何かあったのだろう。

それは、不機嫌さを隠すための偽物の笑顔。

しかし、未空さんが言葉に出さないという事はそれほど大した事ではない。

「ねえ……ソラ……？」

「何———？……ッ」

名前を呼ばれ振り向くといきなり唇を奪われる。

「ふっ……んっ、ぢゅる……れるお……んむう……ああ……はあ……はあ」

鼻を擦りつけ合い食るように濃厚なキスを交わす。

「珍しいね……未空さんからなんて」

俺は思わず嗤ってしまふ。

「そうね……でも、もう我慢できないの……これから暫く会えないのよ？……だから」

「本当にそれだけ？」

意地の悪い顔で聞いた。

「もう……意地悪……ねえ……お願い」

「いいよ……ホントはもっと上手に『オネダリ』して欲しいけど、俺も我慢できないし」

俺がそう言つたとびきり淫らな牝の顔をして微笑んだ……

その後、結局家には帰らず獣の様に求めあつた。

「昼歸りとはあゝ随分と『お盛ん』ですねえお義兄様」

玄關を出ると今一番逢いたくない女に絡まれた。

「……………」

反論するともっと鬱陶しくなるので無視。

「あんれえゝ？いいのかニヤー？私様にそんな態度取って」

どちらにしても鬱陶しかった。

「……………だから何？」

「うつつわあゝ。開き直りやがりましたよ！お姉ちゃんもよくこんなケダモノと恋人やろーなんて思ったもんね。尊敬するわ」

「……………褒めてんの？」

「んな訳ないじゃん」

「ですよー」

「そ・れ・よ・りー。アンタ百っちシメに行くってマジ？」

「百っち？」

「今日これから行く川神鉄心の孫娘の名前よ」

「……………牝？」

「あつきたー！アンタ自分がボコリに行く人の事何も知らないの？」

「別に興味ないし」

「つーか何で、んな事お前が知ってんの？」

「にゅふふゝ私の情報網を舐めんじゃないはよー」

猫のように嗤う。

「てゆーかゝ百っちって私のダチなんだよねえー。だからあんたが本気で潰さないように言っところと思って」

「どういうパイプでつながってんだよ」

つくづくこの女の人脈は計り知れない。

「企業秘密」

「あっそ」

対して興味も無いので引き下がる。

「超絶美少女だからって浮気したらお姉ちゃんに殺されるよ」

「しねーよ……」

「お前も早く慎之介とプラトニックな関係終わらせろよ」

面倒くさいので話題を切り替える。

「んなつ」

焦り、顔は紅くなる。

この女はこうなると面白い。

普段は傍若無人で傲慢が服を着て歩くような女だが、慎之介の話になると途端にしおらしくなる。

「あ、あああんた！？何で知ってんの？」

「んなもん。本人に聞いたに決まってるだろ？」

「慎之介くん！何でよりもってこんなケダモノに相談するの
——！」

此処にはいない慎之介の名前を叫ぶ。

「で、で、何か言ってた？」

頭の切り替えが早い。

ばれてしまった事を恥じているよりも、相談の内容を知り対策することの方が有益と判断したのだろう。

「なんかどうやって誘えばいいか解んないとか言ってたからお前からイケば？」

「そういうのってアリ？なのかな？引いたりしないかな？」

「しねえーだろ？寧ろ情けなくてごめんって言うタイプなんじゃねーの？」

「まあ男つてのは大抵チキンだし……優しく慰めてやれば？」

「ま、大丈夫なんじゃね？」

「人事だと思いやがってー！！」

「人事だし」

「こんのー！！！！」

俺の背中にキレのいいキックが飛んでくる。

体制を屈めて初撃を避わずと物凄い風切り音が聞こえた。

「避けてんじゃねえ！！！！」

「アホか！」

「ここか……」

電車とバスを乗り継いでやっとの事で目的地へとたどり着いた。

その門構えは『北城』と同じく、聳える建物だが嫌味な感じはせず『威圧感』もない。

煙草に火を付ける。

「ふう……」

毒煙が鼻と口から抜け出る。

「おい」

半分ほど吸い終えた所で、声を掛けられる。

「此処は禁煙だ」

ゆっくりと声の主の方向を見る。

「あ？」

女の姿を見た瞬間。

『あの時』の悪魔カクロイと重なる。

姿形はまるで違うが『似ている』と思った。

俺を殺した『死神』と……

「聞こえなかったか？此処は禁煙なんだが」

「ああ………すみません」

「此処に何か用か？」

素直に答えることにした。

「時雨楚良と言つ者ですが鉄心さんいますか？」

「ああ……爺か。ちょっと待ってろ」

そつ言つと背中を向けて去って行く。

「あの女か……」

「（確かに嫌な感じがしたな……。というか『同類』の臭いか）」

く道場く

「おう……待たせたのう……キミが時雨君かね？殺から話は聞いとるよ」

「初めまして時雨楚良と言います。『北城』の依頼で来ました」

「爺い……今日の対戦相手ってこいつか？」

女がウズウズした顔で聞いていた。

「（確かにケダモノだな……）」

「そうじゃよ。さっそくで悪いがお願いしていいかね？」

「いいですよ」

「一つ条件を付けたいんですが、良いですか？」

女の眉がピクリと動いた。

「構わんよ」

「試合中は貴方以外の方を道場に一步も入れないでください。見物も不可でお願いします」

「それと……」

「俺は、この試合で百代さんがどうなっても一切責任を取りません。依頼した貴方の判断ミスだと思って下さい」

「では、尋常に……始めい……！」

合図と同時に地面を蹴り距離を一気に詰める。

貫手でそのまま鳩尾に叩きこもうとするが腕でガードされた。

「ぐうつ……」

「（速度落としすぎたか……ま、腕は逝ったな……ん？）」

「（へえ……）」

「（この私がガードするだけで手一杯だと！？なんだあの動き！？それにたった一撃で腕が……！？）」

「（成程、こりや確かに通常人類の領域じゃないわ……）」

ホロウ・ボット

「お前……時雨って言ったか？武術でもやってたのか？それにしては見た事ない型だな……」

「まあ親戚のオッサンに暇つぶし程度に習ったけど？」

「ぐうつ！！！！あ”っ！！！！」

そのまま向こう側へ吹っ飛び壁に激突した瞬間、天突に肘鉄を入れる。

「ぐうあ…………コブツ……………」

口から大量の血が泡になって吹き出る

呼吸もまともに出来ないのだろう。

『侵食』しているお陰で回復能力も使えていないはずだ。

しかし、攻撃の手を緩めることなくあらゆる急所という急所にダメージを与え続ける。

何度も、何度も繰り返す。

「がああああ！！！！ごふっ！お”えええええええええええ！！！！！！」

吐血した血で足が濡れる。

膝を付き、倒れかけるがその前に髪を鷲掴みにして耳元で囁く

「まだ、気絶する『許可』は出してねえよ…………痛覚も『弄って』何倍も敏感にさせてる。痛えか？どうよ？同じ人間に此処までやられたのは初めてか？あ？これからじっくり時間を掛けて『躰』てやるよ…………テメエは壊れにくいから痛ぶりやすいし…………一切意識を失うことなく死ぬことも『出来なく』してやる。この世の苦痛をたっ

ぶり味わえよ……でも痛みで神経擦り切れて脳がショートしても恨むなよ」

俺はそのあと日が沈むまで百代を痛め付けた……

出会い（後書き）

如何でしたでしょうか？本当に戦闘描写が下手ですいません……

ご意見、ご感想お待ちしております

契約（前書き）

あーあ……楚良の悪い癖が……未空キレるぞ

契約

「おい、爺さん……何呆けてんだ……」

放心状態の爺さんに声を掛ける。

「……………」

それでも爺さんは反応しない。

「ったく……俺の事調べてから依頼しろよ……まあ自分の孫が目の前で壊されてりゃそうなるか……」

どうやらこの爺さんは、俺と違いしごくまともな『人間様』らしい。

鉄心の肩に手を置き軽く揺さぶってやる。

「おい……おい！終わったつつつてんだろぅが」

「——ッ！はっ！」

目の焦点が合い、ようやく正気に戻ったらしい。

「……すまんかった……百代はどうなったんじゃ……？」

恐る恐る尋ねて来た。

「言ったる？殺しちゃいない……回復能力も『修復』したから問題ない」

その言葉を聞き、安心したのか爺さんは糸が切れたようにその場に倒れこむ。

「よかった……よかった……」

俺は見下ろしながら爺さんに告げる。

「っと、確か……百代……だっけか？……放つとくと『堕ちる』な。まあ俺が『プロテクト』掛けたから多分大丈夫だと思うけど……」

「どどういう意味じゃ」

寝転がつてる百代を親指で差しながら説明する。

「アイツの『闘争』への欲求は異常だ。爺さん、それは解ってるよな？」

鉄心は黙って頷く。

「アイツが立とうとしてる領域は人間を『逸脱』する。『高み』じやなくて『堕ちる』んだよ……人間以下の屑豚にな……だから俺がアイツの欲求をに『枷』を付けた」

「ほう……」

理解が早いのは助かる。

「まあ……たまに解放させてやらないと一気に爆発してそのままってな具合だな」

俺は口の端を歪めてにやりと嗤う。

そして、百代の元へゆつくりと歩む。

「百代。俺と『契約』しろ……お前は俺と同じ『ケダモノ』を飼ってる……飢えてんだろ？戦いたいだろ？ぶっ潰して、砕いて、擦り切れてえんだろ？テメエと『同じ』場所には誰も居なかったろ？」

百代がぴくり、と反応し言葉にならない声を漏らす。

「……あ……あっ……」

「だから俺が相手してやるよ……お前がやりたい時にやりたいだけ、やり合おう……手加減も遠慮も一切しなくていい……暴れたいだけ暴れる。俺がテメエの『悪』を肯定してやるよ。テメエの『欲』を満たしてやる。そういう内容で俺と『契約』しよう」

百代がゆつくりと顔を上げる。

「はっ……ははっ……ははは……お前……真剣^{マジ}でサイコお……」

最後にそう言って嬉しそうに嗤った。

契約（後書き）

今回は短め。すみません

まあカナタにやったあれと似たようなもんですね

ソラ理論（前書き）

まあ共感できる人居ないだろうけど、聞いてあげて下さい

ソラ理論

気絶した百代を爺さんが背負いながら言った。

「時雨君。殺から聞いているとは思うが、君には『川神学園』に通って貰いたいと思っとなるんじゃない」

「ああ。まあ、百代との『契約』もあるしそれでいいですよ」

大して興味もないので適当に答える。

「そうか……君は、一体何者じゃ」

鉄心が探る様な瞳で俺を見る。

「言ったる？『ケダモノ』だって。ソイツよりも遥かに凶悪で、厄介で、救いようのない『ケダモノ』。あんたも見たる？俺は『人間』じゃない……『擬えてる』だけだ……」

「そうか……」

少し悲しそうな顔で俺を見た。

「心配しなくても百代は大丈夫だ。それが俺の仕事だし、『契約』だ。あんたの『悪』とは違うが俺のやり方で変えてやるよ」

爺さんは訝しげな顔を顔をして質問して来た。

「先程から『悪』と言っておるが、どういう意味じゃ……正直いい

気分はせんな」

俺は嗤って、俺が定義する『悪』を解りやすい様に答えてやる。

「『悪』ってのは個人的な価値観や嗜好、自分の『物差し』で決めた『ルール』だよ。突き詰めて言えばこの世には『悪』しかねんだ……『正義』だの『自分が正しい』だの言ってる連中だって結局は自分の『欲望』を肯定するための態のいい『言い訳』だろ？自分が少しでも『ラク』になる為に自分は正しい、間違っていないと思っただ方が遥かに楽だから……だから、あんたが百代に『こうあつて欲しい』ってのも、あんたの『欲』で、あんたの『悪』だ」

「む……それは、ちと、乱暴な意見じゃな……同意も共感も得られんじやろ」

「同意も共感も必要ねえよ……誰かのために生きてる訳じゃねえし。俺は俺の『悪』を正しく理解して生きて行ければイイんだよ……」

「それに、気に入らねえんなら食い潰せばいいだろう？この世は悪が鬨ぎあつて成り立ってる……ぶつかり合えば、自分の『悪』を持つてソイツの『悪』を潰せばいい……『勝てば官軍、負ければ負け狗』これってある意味真理だろ？」

「では、勝った方の悪が正しいのか？」

「そうじゃねえよ……『正しい』、『間違ってる』の話じゃない。ただ単に勝った方の悪が負けた方の悪よりも『強かった』だけだ。『弱い』悪は潰れるしかない……けど、負けた悪がソイツにとっての『一番』で、死んでも後悔しなければそれでいいだろ？」

「随分と夢のない話じゃな……」

ふっと嗤う爺さん。

「生きていくのに必要なのは現実一個だろ？その中でどんな『悪』で支えて生きていくかはソイツの勝手だ」

長つたらしい話を最後まで聞いた物好きな爺さんは突拍子の無い事を言いだした。

「お主、今日は家に泊って行け」

「は……？」

「部屋はいくらでも余つとる……行くあても無かるっ」

「随分と物好きだな……」

「ほっほ。お主に言われとつないわ」

「五月蠅せえな……『此処』でもかよ……」

俺は忌々しい『ノイズ』を聞いて眼を覚ます。

煙草に火を付ける。

後で爺さんにどやされるだろうが、今は其れ所ではなかった。

「うぜえ……屑豚が……安眠妨害もいいとこだぞ」

俺は眼鏡を掛け、部屋を出て川神院を後にする。

「はぁ……ま、丁度いいか。俺も溜まってたし」

俺は、口を歪め嗤った。

そして、この忌々しい『修正力《世界の悲鳴》』の引き起こしてる『ムシケラ《悪魔》』を殺しに行く。

ソラ理論（後書き）

はあ……どうして

分界 デイバイド (前書き)

悪魔 カグロイ の登場。

ずっとソラのターン

分界 デイバイド

「青」から「赤」へシフトする。

青白い光を放つ月が血味泥の赤へと染まる。

現実が非現実へと移行した証拠。

「クツセ……」

居る。

近くに、俺が許容出来ない『ムシケラ 悪魔』が。

憎悪、嫌悪、殺意、拒絶、抑揚、興奮、衝動。

あらゆる感情が俺の中で渦巻く。

『愚かだ……実に愚か』

俺を背にして『悪魔 カグロイ』は語り始める。

『つい先日、あれだけ蹂躪してやったというのに……何故、王の慈悲が理解出来ない？』

『高々数百年しか己の肉体を維持できぬ下等生物が……！』

興奮しながら意味不明な事をほざいてゆっくりと振り返り、俺を見る。

身の丈は三メートル以上。

手足は長く、金色の瞳が光っていた。

にやり、と嗤う

口が思いっきり裂けて、長く鋭い牙が露出する。

『そう……思わないか小僧……？』

優越者の貌。

その笑顔は、実に『悪魔 カグロイ』らしい醜く、汚いスマイル。

「うるせえよ……」

一瞬、瞳を大きく見開き、驚いていた。

『小僧……今、何と言った？』

「うるせえつつつたんだよ。ミジンコ」

『……………』

本当にこいつらは面白い。

少し、突いただけでこうも解りやすいアクションをしてくれる。

『余り、調子に乗るなよ？我らの玩具にしかねぬ下等生物が誰に

「い
な
ん
だ」

わなわなと震える『悪魔』。

「き、貴様——！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

咆哮。

人外の動きで俺へと向かって来る。

速く、鋭く、一瞬で。

俺は、火の付いた煙草を吐き捨てバックステップで攻撃を避ける。

地面に突き刺さった腕が引き抜かれ、バカ出かい穴凹が出来ていた。

「俺はさ、お前らに逢ったら必ず殺す事にしてるんだ……絶対に……例外なく」

「何を言って……」ツ

臭い息のしそうな口に腕を突っ込む。

そのまま顔下半分を引き千切った。

どす黒い血がボトボトと落ちる。

次に腕。足。次々に引き千切つて『解体』する。

硬い筋肉がブチブチと音を立てながら裂ける。

厭な音、感触、臭い全てが吐き気がするほどの嫌悪感。

「汚ねえ、くせえ、気持ちワリイ」

残骸に向けて唾を吐く。

「ちったあ百代を見習えよ……」

分界 デイバイド (後書き)

如何だったでしょう。

感想お待ちしています。

短くてごめんなさい

冤罪（前書き）

進まないーい……未空さん怖いよー

冤罪

「どういう状況だよ……」

ベットから降りてまじまじと観察する。

未空さんじゃない女の裸体。

「頭沸いてんのか、この女……」

どういふ思考回路してりゃ自分を半殺しにした男と寝ようと思つのかね。

全裸で。

「おい」

反応がない。

「起きろ、負け狗」

ピクッ！

耳が微かに動く。

瞼が開き、俺を見て妖艶に嗤った。

「ほおう……私を負け狗呼ばわりか……ま、事実だが」

そう言つと未空さんにも劣らぬ我がままボディを押し付け首の後ろに腕を回されて顔が近付く。

「こおんな美少女が裸体で無防備に寝ているというのに……不能か？」

指で顎をなぞられる。

細く、しなやかで白い指。

「アホか……間に合つてんだよ……そういつのは」

瞳を見開いて睨みつけて来た。

めんどくせえ……

「む。詳しく聞こうじゃないか……その話」

頭を掻き耄り眼鏡を掛ける。

「言つたまんまだよ……解りやすく言えば、女はいるからこういう事はノーセンキューって話」

「たまには他の女とやるのもいいものだぞ……」

欲情しきつた貌で迫つて来る。

「はあ……殺されるのはごめんなんだよ……マジで」

ぐいつと百代の頭を押さえつける。

「何……？お前が殺されるだと……？冗談はよせ」

信じられないという顔で俺を見る。

「冗談でこんな事言うかバカが……間違いなく殺される。お前でも瞬殺だな」

「……………プツ……………くく……………は……………ははは……………まさかお前以上の化け物がこの世に居るなんてなあ……………泣けてくるぞ……………自分がどれだけ井の中の蛙だったか思い知らされるなあ……………ぶっ……………くく……………」

言動と表情が一致してねえよ……………ケダモノ。

腹を抱えて一しきり嗤った後、俺に問いかけて来た。

「それはそうとソラ、お前……………昨日夜中何処に居た……………？突然お前の気を感じなくなった……………抑え込んで出来る事じゃない……………完全に消えたんだ……………其れこそ死んだみたいに」

厄介な女だな……………

「コンビニでアイス買って来てたんだよ……………熱かったし」

「二時間以上もか？」

「……………散歩だ」

百代がにやり、と嗤う。

「言いたくないなら……言わなくていい……が、私の知らない世界をいつかお前が教えてくれ」

そんな碌でもない物知る必要ねえよ……お前は……世界を侵す害虫がいる世界なんて

「いつかな……」

俺は永遠に教えないと言う意味を込めて百代に言った。

「約束だぞ」

と此処でノックの音が鳴り響きほぼ同時に扉が開く。

だから……ノックの意味ねえだろ……それ。

「時雨君。そろそろ起き……て……」

爺さんが解りやすく固まる。

……
……
……

「とりえず、冤罪です」

「有罪」

こうして冤罪は増えて行くのだと悟る俺だった。

冤罪（後書き）

短い……ご容赦を。

感想、ご指摘下さい

欲求（前書き）

戦闘シーンが不安で堪らない……どうかアドバイスを

欲求

爺さんに1時間以上の小言を言われ続けた俺は、編入初日だと言うのに遅刻確定であつた。

直接の原因を作った我儘ボディの腐れ狂犬女は、俺が正座をさせられ、男女のプラトニックな関係が如何に素晴らしいかと言う御高説と共に、喫煙者がこの世の蛆で有り、有害であるかを至極丁寧な紙芝居付きで解説されている間に姿を消した。

「あの糞アマ……覚えてろよ」

毒づきながら端を渡る。

途中、ペド禿げやら、ジャンキー女やら頭逝つてる銀髪に遭遇したが、俺の眼球がその存在を無視した。

銀髪のお付きである牝犬に、アズミ並みの殺気を飛ばされたが、面倒な事この上ない状況になりかねないのでこれも無視。

あずみ（メイド）アズミ（義妹）

無性に煙草が吸いたくなくなり、胸ポケットに手を入れるが、

先程の説教の際、眼の前で憎々しく踏みつけられたため、一本も残っていなかった。

「まだこんな時間かよ……あの牝のお陰で散々だ」

時計を見ると、走ればまだ間に合いそうだったが、そんな氣力が起きない。

「（あー……二日もヤツてねえ……）」

そろそろ我が愛しの契約者《恋人》の豊満なバストが恋しくなる。

俺は、貯まった欲求不満　フラストレーション　をどう処理すべきかを悶々としながら考える。

「ぶつ……ホント笑えるくらい執着してんな」

以前ならこんな面倒なことは考えず、先輩を相手に『処理』していた。

そういうどうしようもない、手癖の悪いケダモノだった。

何も考えず、ただキモチイイ快感を貪って、苛めて、処理が出来ればそれで良かった。

今では、あの人でないと満たされなくなった。

そう、満たされる。

壊れた部分を補う様に……

あの人と繋がっている居る時、俺は少しだけ『人間』をやれて居る気がする。

だから『契約』した。

壊れたパーツを補って、俺の欲望を肯定して、受け止める。

これは、『恋』なんて生温い代物じゃない。

酷く独善的で、傲慢で、黝い俺の『欲』 あく。

暫く橋を渡っていると、頭に蛆が湧いている連中がよりにもよってあの狂犬女に喧嘩を売っていた。

「っつだーコラ！今、なんつった??」

百代の口が歪み、ゆっくりと口を開く。

「お前の付けてるストラップ……テトリスだろう?」

静かに、狂気が満ちる。

「(…………勘弁しろよ…………)」

つい先日『枷』を付けたにも関わらず、鎖を引き千切ろうとするトチ狂った女を目の当たりにして頭痛を起こす。

「(浸蝕を無視かよ…………いよいよファンタジーだな。悪魔も真つ青だ、くそつたれ)」

面倒臭い事この上無いが、仕方なく契約を履行する。

「百」

有りつ丈の殺気を背中にぶつける。

鋭く、冷たく、殺意に溢れる殺気。

ギャラリーの連中も静まり返り、震える。

「はっ…………あっはっ…………あはははははははははははは！お前ら

早く来い。面倒だからまとめてなあ……私に大事に用が出来た。アホに構ってる時間が惜しい」

突然、狂ったように笑いだし、瞳に狂気が宿る。

「上等じゃねーか糞があああああ……！！！！」

叫び声と同時に一斉に襲い掛かり、空の彼方へと吹き飛ぶ蛆共。

すると、俺の眼前に一瞬で、移動した百代が鳩尾目掛けて蹴りを入れる。

腕をクロスして防ぐも威力は凄まじく、反対側の鉄柵をぶち破り、川へ落下。

水柱が立ち、勢いが弱まるのを待たず、攻撃を仕掛けて来る。

急所を確実に狙い、当てて来る。

砂利が背中に刺さり、透明な水に血が滲む。

「楚良あ……！！昨日のお前はこんな物じゃなかったろう！真面目にやれ！」

「——るせえよ牝犬が……そんなに公開レイプされてえか……？」

俺の殺気に気付き、攻撃を中止して距離を取る。

着地同時に、構えを取り、頬に伝わる汗が地面へ落ちて、小さなシミを作る。

正拳突き of 構えから拳を突き出すと野太い紅い光線が放たれる。

俺は、右足でそのイカレた塊を頭上へと蹴りあげる。

「なっ！」

瞳を見開きあっけにとられている間に顔面に拳をブチ込む。

勢い良く反対側へ吹っ飛び石壁に百代の身体がめり込み、亀裂が走る。

咳き込み、吐血しながら苦悶の表情を浮かべる百代。

「がっはっ！ごえ！」

地面を思い切り蹴って、百代の眼前へと移動し硬く握った拳を鳩尾に叩きこむ。

「ぐお」

前のめりになった所で、首を掴み握力を込め喉を潰す。

俺は百代の耳元で囁く。

「流石だな……多少力みすぎたから、死んだかと思ったが……くく……ははっ……これだけ痛め付けてもまだ戦意を失ってない……身体 of 芯まで恐怖を叩きこんだにも関わらず、そんな眼で俺を見れるなんて実に優秀だな……百。いよいよ俺も堪らないね……お仕置きと調教の出血大サービスしてやるよ」

野次馬の連中は蹲り、蒼い顔をする。

「お前ら此処からはR指定だ。それとも憧れの先輩が玩具にされるのが見たいかよ？あ？」

その後悲鳴を上げて去って行く野次馬達。

だが、五人だけは動かず俺を見つめていた。

欲求（後書き）

感想お待ちしてまーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1423t/>

世界を浸蝕する者

2011年10月8日22時30分発行